慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『テレーズ・デスケールー』から『贋金つかい』へ
Sub Title	De "Thérèse Desqueyroux" aux "Faux-Monnayeurs"
Author	若林, 真(Wakabayashi, Shin)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.69- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『テレーズ・デスケールー』から『贋金つかい』へ

若林　真

I

本論本集が Hommages à Professeur Satô である以上、先生の弟子の一人としていくぶん私的な感想から稿を起こすことを許していただきたい。わたしは先生に導かれて、学部の卒業論文にはフランソワ・モーリアックを、大学院の修士論文にはアンドレ・ジッドをテーマに選んで、なんとかフランス文学の門口に達することができた。モーリアックに取組んでいたときわたしの関心を主に占めていたのは、『テレーズ・デスケールー』であり、修士論文ではジッドの初期の作品しか扱うことができなかったが、じつを言えば、それも処女作『アンドレ・ワルテルの手記』から、後年のロマン『贋金つかい』にいたる道を模索するためでしかなかった。つまり、わたしの学生時代の文学的関心は、『テレーズ・デスケールー』と『贋金つかい』という二つのロマンを中軸にして動いていたわけである。だが当時のわたしは、小説技法の問題というようなものばかりに気をとられて、自分の頭に同居していた二つのロマンが内的にどのようなつながりを持っているか深く考えてみようとしなかった。ジッドの「誠実」、モーリアックの「誠実」というふうな言葉、モ

ーリアックに与えられた「カトリックのジッド」という呼称などを、ただなんとなく、それはそんなものかというような気持で漠然と受けとめていただけだった。そしてわたしは、二つのロマン双方に対して、キリスト教の問題を及ぶかぎり回避していた、異教徒である自分にキリスト教のことなどとうてい理解できるはずもないと頭から決めてかかっていたからである。だがキリスト教の問題を回避して、ジッドやモーリアックのことがほんとうに語れるはずもなかった。当然、わたしが先生に提出した二つの論文は片手落ちだったはずだが、先生は黙って受理して下さった。その罪滅しのような意味もかねて、わたしの学生時代の先生の思い出に深くつながる二人の作家を結ぶきずなを、とくに『テレーデ・デスケールー』と『贋金つかい』をつなぐきずなを、いくぶん宗教的な観点から探ってみたい。それが本稿の意図であり、目的である。

II

一九三九年夏、アンドレ・ジッドはフランソワ・モーリアックのマラガールの別荘で二週間ばかりの時を過した。[1] これはフランソワの息子クロードの仲立ちによるものである。数年前から年老いたジッドの良き話し相手になっていたクロードは、彼の二人の文学上の師、つまり父フランソワとジッドの対話の実現を、彼自身の文学上、思想上の問題の解決の機会として望んでいたのである。しかしクロードのこの計らいを受けるにあたって、ジッドにかなりのためらいがあったようだ。当時のジッドは大多数のカトリック教徒、カトリック作家を敵にまわしていた。彼に反感を持っていないカトリック作家はごく少数で、フランソワ・モーリアックはその稀な例外の一人だった、[2] そしてジッドへの友情をかくさないモーリアックを非難する声がほうぼうにあった。そうと知りながらモーリアックの別荘に長逗留するとなると、その非難の声がますます高まって、友人を窮地におとし入れはしないかという危惧がジッドにあったのである。じじつその危険の可能性は大いにあった。罪と悪にまみれた人間たちをあくことなく描きつづけているモーリアックを異端者呼ばわりするカトリック教徒が数多くいただけに、なおのことジッドの危惧には根拠があったと言える。

しかしモーリアックはこういう危険をものともせず、心からの喜びをもってその別荘にジッドを珍客として迎え入れたのだった。い

つもクロードをなかにまじえて、二人の大作家は文学を、思想を、宗教問題を語り合った。たとえばある日の対話はこんなふうだった。[3]

ジッド――クリスチャニスムとカトリシスムの間にはいつも対立がある。ぼくもあるカトリック教徒には心をひかれることもあるが、そのときぼくは、その人が多くのカトリック教徒たちの同意に反対してキリスト者としてふるまっていることにすぐ気がつく。こうしてクローデルはカトリシスムを代表し、きみはクリスチャニスムを代表しているわけだ。

F・モーリアック――でもきみ、それはカトリック教会内部での抗争の問題でしかない。それにぼくは自分がキリスト教精神を代表しているなんて自惚れは持っていない。……ぼくの宗教はたいそう貴重ないくつかの慰めをもたらしてくれる。まず第一に懺悔だが、奇蹟のように心が若がえり、しでかした行為が何であれ赦されるという確信が生まれ、ふたたび白紙にもどった歓喜を味わうことができるのだ……

ジッド――それでますます、また罪に汚れることが楽しくなるというわけか！

F・モーリアック――とんでもないよ、ジッド！　きみは懺悔が容易なものだと思っているんだね。それを悪用している人間から推しはかって懺悔そのものまでも批判しないことが肝要だ。廉直な人たちの懺悔には、かならず心底からの悔悟がある。そうでなければ懺悔なんてまったく無意味じゃないか。懺悔しに行くってことは、ずいぶん難しい、つらいことなんだ。

ジッド――ほんとかな！　それは何といったらいいか……そう、ひとつの快楽であるはずだが……

F・モーリアック――きみは荘麗な罪ばかりあるわけじゃないことを忘れている。みすぼらしい、くだらない、滑稽な過誤もまたいろいろあるんだよ。

ジッド――とはいっても、己れを卑下することはやはりひとつの快楽であるはずだ。

F・モーリアック――ぼくに関するかぎりそれはひどくつらいことだ。でもその後では何という歓喜が訪れてくることか！　それに宗教はもうひとつ別の心の慰めもぼくにもたらしてくれる。つまり聖体の拝授だ。そのおかげでぼくは度重ねて一種の絶望を免れるこ

とができた。じゃ、カトリック教会の犯している錯誤、過誤、不正などにぼくはどう対処しているか！　ぼくはありのままに教会を批判している。教会だって人間の制度だものね。きみはぼくが教会から追放されるんじゃないかと言うけど、かりにそれがほんとうだとしても、ぼくはすぐほかの門から教会に帰っていくよ。ぼくがキリストを捨てるなんて、ぜったいにありえないことだ。

ジッド――そうあってもらいたいものだね。きみみたいなカトリック教徒の教がもっと多ければ、きっとぼくも回心するんだが……

この対話のあとでフランソワは、息子クロードにこんな感想をもらす。[4]

「ジッドの心がひどく動揺しているように見えるだろう。話が進むにつれて、ますます彼が説得されているような印象をうける。もしわれわれがたがいに彼という人間を知らなければ、あのような対話の結果、彼の回心も間近いと思うだろう？　だがキリストの敵と対話しているうちに、彼はまたもとのもくあみになってしまう。彼の心が安らかでさえあれば、わたしは彼を回心させようなどとはつゆほども思わない。わたしはジッドという人間を内側からより外側から知りたいと思っている。なぜって、いずれの場合にしろ、彼は悔恨に責め苛まれながら、教会の門のまわりを徘徊せざるをえないんだから。彼には末期の瞬間の回心しか期待できない……」

わたしは数年前、ジッド生前の肉声と、そのジッドにオマージュを捧げるモーリアックの肉声とを同じ一枚のレコード[5]で聞いたことがある。音節をはっきり句切り、あるいくつかの副詞に異常に強いアクセントをおいて発音するジッドの、《肉体は悲し、ああ、われは万巻の書を読みぬ》[5]というマラルメの一句を思い起こさせるようなものうい声、また喉頭癌とおぼしい病気[6]でつぶれた声帯からふりしぼるように発するモーリアックの、まるでうめき声のような、ランド地方を吹きぬけるいがらっぽい風のような声を、わたしははっきりと憶えている。あの対話がこの二つの声の交錯であり合唱であったと思うと、わたしの脳裡にさまざまな連想がうかび上ってくる。

ジッドに対するモーリアック――それはテレーズ・デスケールーに対する作者モーリアックにある面で似ていないだろうか。テレーズ・デスケールーほどモーリアックの心をはなさなかった人物はない。一九二七年の同名の小説をはじめ、三五年の『夜の終わり』でも主役をつとめ、この二つの小説にはさまれる時期のテレーズは、『失われたもの』（三〇年）につかの間ながら姿をあらわし、そのエ

ピソードは短篇小説『医院でのテレーズ』(三三年)、『ホテルでのテレーズ』(三三年)で語られている。

口もとのきっとひきしまり、ひろい美しい額をしたこの女、さえきった目で周囲の人びとの偽善、悪徳は何ひとつ見落さず、人間の情念の危険な動きを最大もらさずその鋭敏な肌に感じとり、現世での愛の成就に絶望しながらもつねに永遠の愛を渇望してやまないこの女、「あの女がきれいか醜いかなどと、誰も自問したりはしない。あの魅力をいやおうなしに感じてしまうんだから」[7]と土地の人たちから陰口をきかれたテレーズの罪多き人生行路を、モーリアックはなんという愛情と共感をもって描いたことだろう。「有徳の君子を描きたまえ」、「人物の道徳的水準をもう少し高めるようにつとめたまえ」[8]という、世間のいわゆるお堅いカトリック教徒の非難がモーリアックの耳に聞こえていなかったわけではない。しかし彼はテレーズの魅力の呪縛からついに脱することができず、あるときは彼自身が彼女の罪業の共犯者[9]になっているような趣きさえ呈している。そして作者はテレーズにいまはのきわまで救いを用意してやらなかった。テレーズは救いに到達するために、この世の生の終わりを、つまり「夜の終わり」を待たなければならなかった。『パリサイの女』(四一年)の女主人公ブリジット・ピアンのように、きちんと教会にかよい、自分の美徳をこまごまと数えたてるような女より、夫毒殺未遂犯テレーズの悩める魂のほうが、まだしも神のみ心にかなうものだと、モーリアックは堅く信じていたのである。[10]

モーリアックのジッドへの友情の秘密は、これでいくぶん明らかになったことと思う。[11]時にジッドの背徳者ぶりに激怒したモーリアックではあるが、その激怒のなかにはかならずいちまつの優しさがかくされていた。宗教上の問題からポール・クローデル、フランシス・ジャムと絶縁状態におちいり、愛弟子ジャック・リヴィエール、親友アンリ・ゲォンから背を向けられ、アンリ・マシスから猛烈な攻撃の矢をあびせられていたジッドを、いつもあまり目立たぬように弁護していたカトリック作家こそモーリアックだった。[12]つまりモーリアックは、ジッドの「誠実」を、その不穏な言動にもかかわらず根本的にはジッドがキリスト者であることを、片時も疑わなかったからである。

いままでわたしは、ジッドをテレーズになぞらえて語ってきたが、もちろんジッドがテレーズそのものだなどと言いたかったのではない、モーリアックのジッドへの友情の秘密を説き明かそうとしたまでのことだ。断るまでもなく、ジッドはテレーズとは比較にならな

ないほど複雑な、明晰な、大胆不敵な、力強くスケールの大きい精神だった。テレーズの魂はともかくもモーリアックのしつらえた単線的構成の小説[13]の枠に収まったが、ジッドの魂はとうてい『テレーズ・デスケールー』や『夜の終わり』などの平板的構成の枠のなかに収斂していくていのものではなかった。それはおそろしく複雑な立体的構造を必要としていたのである。ここから『贋金つかい』の小説美学の問題がはじまる。

ジッドはそれまで、『パリュード』(一八九五)、『鎖をはなれたプロメテ』(一八九九)などソチと呼ばれている作品群ではイロニックに、『背徳者』(一九〇二)、『狭き門』(一九〇九)などレシと呼ばれている作品群ではパテティックに自画像の断片を描いてきた。それはあるときには横顔であり、あるときには正面からの表情であり、またあるときは前向きの画像であり、あるときは後姿であった。『法王庁の抜穴』(一九一三)で最後のソチを、『田園交響楽』(一九一九)で最後のレシを試みたのち、ジッドは自己の立体的全身像を描いてみたいという欲求にかられたのである。彼はその立体的全身像にはじめてロマンという呼称を与えるだろう。このロマンのなかでは、彼の複雑多岐に渡る精神の諸傾向がさながらフーガ曲のようにひとつの構造体にまとめあげられていかなければならない。こうして小説美学に関する問題が作者の主要な関心を占める、あるいは占めているように見える。じじつ作者ジッドの代弁者、つまり『贋金つかい』作中の小説家エドゥアールは、純粋小説の理論に日夜頭を悩ましまし、またこのロマンの付録として発表された『贋金つかいの日記』の大部分のページは、小説構成に関する純粋に美学的な問題の研究に費されている。こうして『贋金つかい』は二十世紀における小説概念変革の記念碑的作品として、多くの人びとに評価され、論じられることになった。『贋金つかい』の大きな価値のひとつがそこにあることをわたしは疑うものでは決してないが、本稿の目的は小説技法的論議をむしかえすことではないし、少なくともいまのわたしにはその情熱はない。それはフランスであると日本であるとを問わず、あまりにも多くの人びとがあまりにも多様に語りすぎた。いわゆる「純粋小説論」がどのようなものであるか知ろうと思ったら、作中のエドゥアールの日記、ジッド自身の『贋金つかいの日記』を仔細に読めば十分である。またそれが現代小説史において占める位置ないしは意味を知ろうと思ったら、つい先日他界した閨秀批評家クロード=エドモンド・マニーの『一九一八年以降のフラン小説史』中のジッド論[13]をひもとけば十分である。おそらくい

ままでマニー以上にジッドの小説美学を鮮かに手ぎわよく解き明かした人はいないだろうから。

マニーは同書のなかで、『贋金つかい』という作品の「意味」はロマンの構造それ自体に内在するものであって、決して知的言語に要約できないものだというようなことを述べている。[14]『贋金つかい』が何かひとつのドグマを証明したり、宣伝したりすることを目的とするいわゆるテーゼ小説（roman à thèse）ではないという意味で、マニーの指摘はまったく正しい。しかし知的言語に要約されえない「意味」とは何であるか、また彼女の説くところの《中心紋》の技法[15]による作品構造から必然的にかもしだされる「神秘と深奥の幻影」[16]とはどんなものであるかを、考察してみなければなるまい。

作中の小説家エドゥアールは、その日記にこんなことを書き記している。

「これまで、いわば非劇的なものが文学からほとんどすり抜けているように思う。小説は運命のもろもろの障害、幸運あるいは不運、社会的関係、情念や性格の相剋などを取扱ってきたが、存在の本質そのものについては何ら顧慮するところがなかった。

もっとも、ドラマを道徳的な面に移すことはキリスト教の努力したところだった。だが実のところキリスト教小説なるものはない。教化を目的とするものはあるが、ぼくの言わんとするものとは何の関係もない。精神的な悲劇――たとえば、《塩もしその味を失わば、何をもってかこれに塩すべき？》という福音書の言葉を、あれほど恐ろしいものにする精神的悲劇、そういう悲劇こそ、ぼくには大切なのだ。[17]」

エドゥアールのこの言葉はほぼ作者ジッド自身の意見と解してさしつかえないのだが、字面からうかがわれるほどその意味するところは簡単ではない。『田園交響楽』によってカトリシスムもカルヴィニスムも同時に乗り越えたジッド[18]は、『贋金つかい』の制作当時、人間中心主義的ユマニスム（humanisme anthropocentrique）[19]を目指していた。人間は神の姿に似せて創造されたのではなく、人間が自分の姿に似せて神を創造したのだ。そのときキリストは神の子というよりはむしろ神の創造者、ありうべき理想的人間ということになる。ジッドはこのキリストをこよなく愛し、その彼が十字架にかけられたことを不当であると考え、彼を見殺しにした残忍な神[20]を否定しようとしていた。

神の否認は必然的に人間の肯定にいたらざるをえない。こうして『贋金つかい』は人間肯定のロマンになるはずだが、しかし、そもそも人間の肯定とは何であるか？　絶対者を排除するかぎり、人間が自他に呈示する価値はすべて相対的になり、モラルは人間の頭数だけあるということになろう。これらの人間たちによって構成された世界はひとつのカオスである。しかし人間はこのカオスの中にあって、本来相対的なものでしかないはずの自己の価値とモラルを絶対的なものであるかのごとくいつわって、自他に呈示しなければ生きていけない。こうしてすべての人間は「贋金つかい」になる。そしてジッドのロマンは、あらゆる価値とモラルを相対化して相殺するための複雑なメカニスムになるだろう。このメカニスムのなかに、「存在の本質そのもの」(l'essence même de l'être)[21]がうかびあがってくる。それはマニーの説くように、ひとつの知的言語に要約されるようなものではなく、「神秘と深奥の幻影」である。

たしかに『贋金つかい』はエドゥアールの言うようにキリスト教小説(ロマン)ではないし、ロマンとは何よりも人間的現実をからめとるものであるとすれば、絶対者が人間を押しのけて中心の座を占めることになるはずのキリスト教小説(ロマン)とは、そもそも言葉の矛盾であろう。しかしこの徹底した非キリスト教小説の「神秘と深奥の幻影」を見つめているうちに、ジッドが排除したはずの神のみもとに導かれ、決定的に回心した人間がいたとすればどうなるか？　いささかもカトリック教の教化などを目的としていなかったランボーの作品に衝撃を受けて堅信の世界に入ったクローデルのような男がもしいたとしたら？[22]

そういう男がいた。その名をジャック・レヴィという。[23] エコール・ノルマルの秀才だったこのユダヤ人青年は、『贋金つかい』における「悲劇的なもの」に戦慄してカトリックに入信したのだった。事もあろうに反カトリックの急先鋒の手になるロマンに導かれて、ひとりのきわめて知的なユダヤ人がカトリック教会の門をくぐったとは、なんという驚くべき皮肉であることか！

われわれはこの青年の誠実を疑うことができない、なぜならアウシュヴィッツのユダヤ人収容所の、一片のパンを求めて骨肉相食む生き地獄のなかにあって、ただひとり静かに従容として、歓喜の情さえうかべながら中庭を歩いていたのは彼だったのだから。[24] ところでレヴィは、アウシュヴィッツのこの悲劇的体験に先立ってすでに回心の書をものし、それに『アンドレ・ジッドの《贋金つかい》と宗教的体験』と題していた。[25] タイプに打った草稿と手紙をレヴィから受けとったジッドの驚きはいかばかりだったろう。ジッドのレヴィあて

の返信[26]の日付けは、ル・モン・ドール発一九三九年七月二十五日であるから、ジッドがモーリアックのマラガールの別荘を去ってから二週間後のことである。モーリアックとの対話の余韻がまだジッドの脳裡に残っていたに違いない。ジッドのレヴィあての返信は左のごとくである。

「わたしは驚きを新たにして、貴君の論文を再読し終えたところです。あの作品を構成しながら、わたしは貴君の慧眼な分析が登場人物や筋の創造のなかに発見したすべての必然的なものを、かならずしも意識していなかったようです。しかしわたしは、貴君の主張していること、(そしてしばしば貴君がわたし自身に解き明かして下さったこと)に、全面的に同意します。(無意識のうちにしろ)わたしがおこなった、たえざる、ひそかな動機づけを貴君が発見して下さったことに、どれほどわたしは感謝していることでしょうか！貴君は初めの手紙にこんな言葉を記しておられた、《ボリスの死の残酷さは、すべての作中人物に重くのしかかっているひとつの集団的犯罪であるようにぼくには思えます。その残酷さが作中人物の連帯性を明らかにし、この作品の表題にその意味を与えています》。この一句を読んでわたしは感謝の気持でいっぱいになりました。そう、理解しなければならなかったのは、まさしくそれです。それがこの作品の鍵であり、かなめ石です。すべてがそこに到達し、作品構築の努力もそこにあります。(貴君が指摘しておられるように、各章はそれ自体孤立したひとつの全体であるように見え)、はじめのうちは人物や対話や事件などがひどく複雑多岐に渡っているように見えるかもしれませんが、じつはすべてがそこに集中し責任をわかち持っているのです。」

たしかに『贋金つかい』のなかでもっとも衝撃的な事件は、巻末における世にも潔らかな魂を持ったボリス少年の自殺であろう。そして、すべての人物の言動・事件がこの一点に向って集中していることは誰の目にも明らかだろう。しかしこの「集団的犯罪」(crime collectif)の危害は、ボリス少年だけが負わなければならない運命ではなく、もしこのロマンがはてしなくつづくとすれば、どの登場人物にもいつ訪れるかわからない運命である。たとえばこの小説の第一部で、レディ・グリフスことリリアンを相手にさんざん軽佻浮薄なところを見せたヴァンサンが第三部にいたって、アフリカの僻地でひとりの女(レディ・グリフスらしい)を殺したのち発狂した男として、一人物の手紙のなかで間接的に(ということは、他人にとってはとるにたりない人生の一現実として)報告されているが、

これなども「集団的犯罪」のぶきみな一例だろう。もしこの世から超越神を排除すれば、いきおい人間は孤独のなかでうごめかざるをえない。そしてその多様なうごめきが、いつのまにか「集団的犯罪」を構成して、人間相互の殺し合いにいたる。

ジャック・レヴィは、『贋金つかい』のなかにこの地獄を見たのである。そして孤独が人間の失墜であることを悟り、ジッドの人間中心主義的ユマニスムの破産を確認し、一転してカトリック教会の門をくぐり絶対の神に帰依した。カトリックへの教化などをつゆほども意図しなかった小説が、皮肉にも教化的小説の役割を果してしまったのである。

しかし自作が内包しているこのような痛烈な皮肉に、透徹した意識家のジッドが、はたして気づいていなかったかどうか、これはかなり疑問の余地のあるところだ。なぜなら『贋金つかい』執筆当時、ドストエフスキーのことがたえずジッドの念頭にあったはずだから。[27] たとえばイワン・カラマゾフは苦悩せる人類への愛のために神を捨てる。しかし、「もし神が存在しなければ、すべてが許される」というふうな命題は、無神論的ユマニストをおそるべき思想的混迷の暗闇のなかにひきずりこみ、結果として神の存在の必然性を認めざるをえなくなるところまで連れていく可能性は十分にある。ジッドがその可能性を意識していなかったとは考えられない。その意味でジャック・レヴィのような男は、かならずしもジッドの意表をつくものではなかったのではあるまいか？

断っておかなければならないが、わたしはかならずしもジャック・レヴィの『贋金つかい』論に同感しているわけではないのだ。彼の分析にかかると『贋金つかい』という複雑な有機体が、たとえば中世の『ばら物語』のような一篇の寓意物語に変じかねないし、ノルマリヤンの秀才ぶりまるだしの、明快ではあるが、あまりにも形式論理的な推論にはいささか辟易する。だが秀才の答案のような文章の行間ににじみ出ている彼の読書体験の痛切さ、アウシュヴィツの中庭を歩む彼の聖者のような面影の真実さをわたしは疑わない。

たしかに『贋金つかい』という小説には、おそるべき爆薬がしかけられている。この小説がわが国に紹介されてからすでに久しいが、人びとはその新奇な衣裳のみに関心をうばわれ、いわゆる純粋小説論にふりまわされて、このロマンの恐さを知らなすぎた。われわれはあらためてこの作品の構造に内在する深淵にのぞきこんでみなければならない、そしてマニーの説く「神秘と深奥の幻影」にたじろがずに眺め入ってみなければならない。

いまわたしは、一九三九年夏、モーリアック家を立ち去る支度をしているときのジッドの姿を思いうかべている。[28] ジッドはやっきになってトランクのふたを閉めようとしているが、詰めものが多すぎるせいか、なかなか留金がかからない。彼はひっきりになしにぶつぶつ言っている、「変だ、変だ」と。うずくまってなおもむなしい努力をしている七十歳の老大家の赤らんだ禿頭に青筋が立つている。ジッドの精神のトランクのふたはついにしまらなかった。そして、いまはのきわになっても、フランソワ・モーリアックが期待した回心の奇蹟は、ついにアンドレ・ジッドを訪れなかったのである。

注1 cf. Clande Mauriac: Conversations avec André Gide, Editions Albin Michel, Paris, 1951——同書によればジッドは一九三九年六月二十七日から七月十一日までモーリアックの別荘に滞在している。

2 cf. Catharine H. Savage: André Gide, l'évolution de sa pensée religieuse , A. G. Nizet, Paris, 1962, p. 204.——《Les rapports entre Gide et François Mauriac font excepton. Seul Mauriac, qui lui aussi avait construit son oeuvre sur les landes sablonneuses du péché et qui comprenait la force de la passion dans une âme pourtant chrétienne, ne dénonçait pas la corruption irréparable de Gide et n'abandonnait pas l'espoir que la grâce se ferait jour en lui. Mauriac garde cette attitude jusqu 'à la mort de Gide, de sorte que les rapports entre les deux romanciers restaient amicaux. Gide appréciait sans doute à sa juste valeur cette tolérance de la part du grand romancier catholique.》

3 cf. Claude Mauriac, op. cit., pp. 148-9

4 Ibid., p. 149

5 Les disques de France: André Gide——La leçon de piano, dit par André Gide, La Bille, dit par André Gide (Ext. du film André Gide de Marc Allégret avec l'accod de Panthéon-Productions), Hommage à André Gide, dit par François Mauriac de l' Académie Française.

5 Stéphane Mallarmé: 《Brise marine》の冒頭の一行——《La chair est triste, hélas! et j'ai lu tous les livres.》——ちなみにこれはジッドの愛唱した詩の一つだった——cf. Anthologie de la poésie française, rédigée et préfacée par André Gide, éd. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1949. p.598

6 一九三二年にモーリアックはこの病気を患い、一時は絶望という診断を下されたこともある。それは、《Souffrance et Bonheur du chrétien》(1931) を刊行して、信仰上の危機を克服してから間もないころのことである。

7 cf. Thérèse Desqueyroux, Editions Grasset, Paris, 1927, p. 43

8 cf. François Mauriac: Le Romancier et ses personnages, Editions Corrêa, Paris, 1952, p. 131

9 Ibid. p. 133

10 Ibid pp. 133-4《Le héros du Noeud de Vipères ou l'empoisonneuse Thérèse Desqueyroux, aussi horribles qu'ils apparissent, sont dépourvus de la seule chose que je haïsse au monde et que j'ai peine à supporter dans une créature humaine, et qui est la complaisance et la satisfacton. Ils ne sont pas comtents d'eux-mêmes, ils connaissent leur misère.》《Le sacrifice, selon Dieu, est-il écrit, dans le psaume I, c'est un esprit brisé. Le coeus contrit, humilié, ô Dieu! vous ne le mépriserez jamais!》

11 前掲の注2と注10を比較対照していただきたい。

12 この間の経緯は前記 Catharine H. Savage の労作に精しく述べられている（とくに第五章《La Tentation du catholicisme》、第七章《Le Christ contre le christianisme》、第八章《Zeus et Prométhée》に詳細に論述されている）。

13 モーリアックの小説を単線的構成の小説と呼ぶことに、疑義を持たれる方もあるかもしれないので、いささか私見を述べてみたい。モーリアックには小説論として主なものに《Le Roman》（1928）、《Le Romancier et ses personnages》（1933）の二著があるが、そこから小説家モーリアックの作品構成技法の特徴を引き出してみよう。要約すれば次のようなことだ――十九世紀のレアリスムは、生きている存在の非論理的な複雑混沌を見落している、現代作家は何よりもこれを回復しなければならぬ、イギリスやロシアの作曲家たち、なかんずくドストエフスキーが最上の手本である。しかしフランスの作家たる以上、民族の精髄ともいうべき論理、明晰、秩序も忘れることができない。つまり『クレーヴの奥方』と『悪霊』の総合が小説家モーリアックの野心なのだ。じじつ『テレーズ・デスケールー』では、プルーストにはじまる内観的手法が用いられ、主人公の内的独白のうちに、魂の混沌たる深層に読者は連れこまれていくが、伝統的心理小説の緊密な構成の枠をはみでることは決してない。均斉美の極致ともいえるヴェルサーユ宮殿にうごめくどす黒い形をなさない人間の情念――これが『テレーズ・デスケールー』の特質をなすものだ（中央公論社刊・世界の文学・第三十三巻、『ジード・モーリアック集』所載の拙文参照）。ドストエフスキーを行きづまったフランス小説の突破口として高く評価するという点で、モーリアックはジッドに一致し、ジッドがフランス作家のうちでドストエフスキーをもっともよく理解した一人であることもモーリアックは認めている（cf. Le Roman, éd, L'Artiran du livre, Paris, 1928, p. 53）。しかし、ジッドの『ドストエフスキー論』(Dostoïevsky éd. Plon, Paris 1923) が一貫してフランスの伝統的心理小説の枠を破るためのものであるのに対して、モーリアックはフランスの伝統的心理小説の特質を失うまいとし、ジッドの『狭き門』を『贋金つかい』に対置して、前者の擁護さえ試みている。《Après tout, la vérité humaine qui se dégage de *la Princesse de Clèves*, de *Manon Lescaut*, d' *Adolphe*, de *Dominique* ou de *La Porte Etroite* est-elle si négligeable? Dans cette classique *Porte Etroite* de Gide, l'apport psychologique est-il moindre que ce que nous trouvons

dans ses *Fauxmonnayurs*, écrits selon l'ésthétique la plus récente ?≫ (Le Romancier et ses personnages, op. cit., p. 154) わたしがヤーリアックの小説を単様的構成の小説と呼んだのは以上のような理由からである。

13 cf. Claude-Edmonde Magny: Histoire du roman français depuis 1918 Tome I, Editions du Seuil. Paris, 1950,——Voir chapitre Ⅷ (Impasses et ambitons du roman—les intentions—) et Chapitre Ⅸ (Impasses et ambitions du roman—les réalisations—) ちなみにマニーは一九六六年七月三十日パリで死去した。

14 Magny, op. cit., p. 276

15 マニーは前掲書の第九章、第四節の表題を≪La (mise en abyne) ou le chiffre de la transcendance≫とし、中心紋 (abyme) による構成技法が『贋金つかい』のかなめであるとしている (cf. Magny, op.cit., pp. 269—70) ジード自身がこの用語をはじめて使ったのは、一八九三年の日記の中である (cf. André Gide: Journal 1889—1939, éd. Bibliothèque de la Pléiade. Gallimard, Paris, p. 41)

16 cf. Magny op, cit., p. 270≪……avec quel attirance, quel vertige métaphysique nous nous penchons sur cet univers de reflets qui s'ouvre brusquement à nos pieds; bref quelle *illusion de mystère et de profondeur* produisent nécessairement ces histoires dont la structure est ainsi (*en abyme*), du mot si heureusement choisi par héraldistes.)

17 cf. Les Faux-monnayeurs, éd. Gallimard, Paris, 1925, p. 160

18 かねがねジッドは、聖パウロとカルヴァンの嫌悪を表明してきた。両者はキリスト教を戒律と罪の宗教のすることによって、キリストの教えをゆがめていると、彼は考えていたからである。ジッドにとってキリスト教とは何よりも愛と慈悲の宗教だった。『田園交響楽』の悲劇は、(Pour moi, étant autrefois sans loi, je vivais; mais quand le commandement vint, le péché reprit vie, et moi je mourus.) という聖パウロの一節を中心軸として展開している。(cf. La Symphonie pastorale, éd. Gallimard, Paris, p. 136)

19 Cf. Catharine H. Savage op. cit, p. 228

20 『贋金つかい』の末尾でラ・ペルーズ老人にジッドはこんなことを言わせている——≪——Et savez-vous ce qu'il a fait de plus horrible!… C'est de sacrifier son propre fils pour nous sauver. Son fils! son fils!…La *cruaaté*, voilè le premier des attributs de Dieu.≫ (cf. Les Faux-monnayeurs op. cit., p. 499)

21 cf. Les Faux-monnayeurs op. cit., p. 160

22 クローデルは、一八八六年にランボーの≪Les Illuminations≫と≪Une saison en Enfer≫を読んで衝撃を受け、その年のクリスマスにパリのノートル・ダム寺院で、「聖母讃歌」(マニフィカート) の最中に聖寵にふれて、決定的に回心する。

23 cf. Jacques Lévy: Journel et Correspondance, Fragments précédés d'une étude sur (Les Faux-monnayenrs) d'André Gide et l'expér-

ience religieuse, avec deux lettrres inédites d'André Gide, Editions des Cahiers de l'Alpe, Grenoble, 1954.

24 cf. Jacques Lévy, op. cit., p. 9 (Préface par M. G. Morelli, Dominicain)

25 注23参照。

26 Jacques Lévy, op. cit., pp. 36—7

27 『贋金つかいの日記』によれば、ジッドが『贋つかい』の制作を思いたったのは一九一九年六月十七日であり、その完結は『日記』によると一九二五年六月八日である。ところでジッドがヴィユー・コロンビエ座でドストエフスキーに関する有名な講演を行つたのは、一九二一年と二二年である。

28 cf. Claude Mauriac op. cit., p. 179

本稿が集英社版「世界文学全集、ジィド・モーリアック集」巻末の拙文に重複している個所があることをお断りしておく——筆者——

——le 18 septembre 1966——